

トギコ

號月一十



昭和八年九月二十六日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十三年十月二十七日印刷納本 昭和十三年十一月一日發行

コ
ギ
ト

第七卷第十一號
第七十八號

コギト 目次

第七十八號

昭和十三年十一月號

朝鮮の印象	保田與重郎	四頁
大榎や太郎松五郎松	池澤	茂十一頁
詩集西康省	中河與	一十八頁
蕪村の系譜	小高根次郎	二十頁
テーブル・スピーチ	阪本越郎	二十三頁
晩食の後	津村信	失二十八頁
田中克己に	芳賀	檀三十頁
ニーベルンゲンの歌(三)	服部正己	三十三頁
或る都市の街頭より	フライタアク	薄井敏夫 四十九頁
埃及の女王クレオパトラ(中)	田中克己	五十五頁
秋草抄	船越	章六十六頁

相聞千首	三浦常夫	六十八頁
雁	眞田雅男	七十一頁
感想	伊東靜雄	八十九頁
私信代りに	中島榮次郎	九十頁
讃歌	三浦常夫	九十二頁
詩集西康省	薄井敏夫	九十三頁
三月の糧	松田	明九十四頁
すぐれたる詩業の成就	船越	章九十六頁
文學史的な感銘	保田與重郎	百頁
ヤコブセンの短篇を譯して	澤西	健百四頁
詩集西康省あとがき	田中克己	百五頁
表紙 (橘夫人念持佛光背 白鳳時代)		
扉 (天龍山菩薩頭)		
編輯後記 (百十頁)		

詩集西康省

十八

中 河 與 一

「詩集西康省」の出た事を喜ぶ。私は氣質的に田中氏の詩を何時も好んだ。よむたびにこんな詩人はなかつたと思つた。氣質といふものは仕方がない。轉向のしようのないほど純粹なものだからだ。さういふ意味では私にはこの詩人の詩よりも今のところいゝ詩があるとは思はれない。小手先のやうなものか、器用さの眼につくものか、世俗の露骨を大切とするものか、さうでなければ世俗に染まりながらやつとそれを美化してゐるものか——

そんなたはいもないものの中で、この詩人だけは詩の血統を持つてゐた。

何よりもそれは高貴の姿を持つてゐた。國土の匂ひがどこかでした。詩人になればならぬ緻密さと同時に壯

大なるものが何時も感じられた。斯ういふ性格は餘り今までの詩集にはなかつた。端麗と言葉のセンスの深さとが何時も私を喜ばせた。そつけないやうで實は大變きどつてゐた。

畫

ソオダ水をよぎる雲

葡萄にゐる蝶

睫毛には陽のかげりの濃さが

私は一度もこの人に逢つた事がない。然し何時もその詩をよんでゐた。讀むたびにこの青年詩人の趣味を愛しだした。これはいかんと思つた。然しそれは間にあはなかつた。私は最早最もこの詩人の近くに自分がゐる事を

發見した。

私は泥くさい詩も嫌ひではないが、そして餘りにそんなものの多かつた中に、この詩集の現はれた事を一つの時代の啓示と思つた。

私は詩の衰亡といふ事は精神の衰亡であると考へてゐる。文學それ自身の衰亡であると考へてゐる。實際吾々の文學はその衰亡の時が長かつた。萩原朔太郎氏以後、吾々は詩の傳統を見失つてゐた。今漸く吾々はこの詩集と共に文筆をとりかへしつつかある氣がする。

この詩人には魂の苦悶と同時に、然しそれを口外せぬ詩人の高邁さがあつた。私は嘗て總ての詩人達が魂を失つてシュールレアリスム風の技術主義になつたり、力みかへつたダイナミックに走つた時、この詩人が高邁の詩の傳統をひそかに守つてゐた事に尊重を覺える。

集中私の好む詩は「天上有事」であり、「秋の湖」であり、「虎」であり、「丘の上、松の木蔭」であり、「俺は惡魔を——」であり、「奇蹟」であり、「零落」であり、「植木屋」であり、「西康省」であり、「登山道路」であり、「愚者の智慧」、「廳」、「巨」であつた。

少し大げさに云へば、私は明治以後漸く詩に黎明を感じだしたと云つてもいい。

本の表題になつてゐる長詩「西康省」にある積み重ねられてゆく大いなる力と事實の量と、民族の混沌と、風土の匂ひと、ユモアと、そしてこれに對する敏感の豫言は、今日の詩界に嘗てみなかつたものである。

「植木屋」といふ詩は次ぎのやうにかゝれてゐる。

植 木 屋

遠い海から波が來て

眠いひるすぎに山茶花を植ゑる

庭の芝は枯れ日蔭では土がくづれ

家中の留守をして

物みな變改すと 本を讀むとき

聲を出してよみ悲しく思ふ

これは稚拙の言葉に詩情を漂はしたもので、この詩には心臓がある。私が尙ほこの作者に要求したいものは新しい軍歌である。その片影がないとは云はない。然し私はさらに魂の進撃を鼓舞する叡智の叫びをこの詩人からききたい。

蕪村の系譜

二十

小高根二郎

このほど田中克己遺稿集が上梓せられた。と云つてもわからぬひともあることだらうが、詩集西康省が前身の謂である。この春まだ寒い霞する午下りのことであつたか田中氏を南海の高師ヶ濱に訪れた。その時、無言で氏が私に示されたのがそれであつた。部厚な繪帳と見えるものに丹念にペンで百にもあまる詩が手寫されてあり、黄色の表紙には墨痕あざやかに田中克己遺稿集とあつた。

さう書かしたものが何であつたにせよ、はからずも遺稿集は生前に見事な一巻となつた。こんな目出度いことは再たあつたものではない……と言ひは言つても、その一篇、一篇の底では、あの何處にももつてゆき

どのないやうな、堪へるだけ寂寥に堪へたと云つた横顔を見せて、やつぱし遺稿集なのですと、淡々と氏が裏切るやうな氣がしてならない。常に乗ぜられることのない冷徹さ、最後にまで善と自分を眞實を手放すことのない峻烈な詩精神が氏の切札であり、當今希有にして見ぬかけがひのない身上であると思つた。

遠く國原を眺めると

波濤のやうに丘陵が起伏してゐて

雲はその地平に潜んでゐた

わたしは物憂く頰杖ついて

何思ふともなく亭にゐた

そのとき俄かにきみの死が悲しく

泪はきらきりと輝き出で

雲は屹然と身を起した

「もうわたしは友情など要らぬ齡だ

ひとの死を悲しむのも幾度目か」

眼をあげて答へを求めると

凄じい稲妻が一閃した

——丘の上、松の木蔭で——

その稲妻がそれだ。それはこのひとの泪の二様性によるのであらうか、而もいさゝかも矛盾することなしに、許容と拒絶とが同居として、なく表裏として存してゐるからなのであらう。拒絶とみせて許容してゐる、一寸油斷すると煙霧の彼方に拒絶像のまんまで端然と立つてゐたりする……が要するに、その何れかの解決の鍵は讀者に與へず、好んで自分の方寸に秘めてゐる。それがまた彼の不斷な魅力となる所以のものであり、恐らく何處に行つても慰撫され、満されることを知らない無限際の悲しみとなるのではなからうか。假令へば「佛蘭西にある友に」を讀んで見給へ、友田恭助の討死、先輩の戦死、或ひは保護されてゐる石佛、最後にインキを覆す幼

兒……はみんな實は無事なのではあるまいか、唯十一行目の平凡な文字が此處でも油斷のできぬ彈丸となつて爆裂することになるのである。

寒梅や火の迸る鐵より

——蕪村——

この果敢にして峻烈な強靱さは、今日たしか田中氏の血にある。伊東靜雄氏は生粹の美はしい妄執の強さであり、神保光太郎氏はもつと健康な蓄積的な生の強さと云ふことができるやうに思ふ。とは云ひながら氏は強靱のみを決して武器とはせぬ。一卷に満ちてゐる初期のあの馥郁たる抒情のこまやかさ……それに或ひはより以上の魅力を今日の日なほ私は持續けてゐる。その世界では何の氣構へもなしに何時でも飄然と入れ、安心して憔悴せずに出てこれるためかもしれない。「畫」とか「寒鳥」とか「悲劇」とか

紙ナブキンに花びらが散り

ナイフの刃には峨々たる山脈が映つてゐる

蝶がこの食堂車に舞ひこんで來た

——春旅——

氏が始皇の系譜のひとつであるか、どうかは知らない。

然し生々しいまでの蕪村の系譜を感じてゐるのはたゞに私一人だけであらうか

鹿ながら山影門に入日哉

—— 蕪村 ——

成心ある詩人はこの街をすてた。例外をつくらず氏が東京に去つたのは一句前である。其處にはたして氏が故郷を見出しうるであらうか、それは知らないが私は安心してそのうしろすがたを、東洋にふみ入つた旅人のなつかしさとたのもしさで見送つてゐながら、蕪村が延享の初めにつくつて了つたとも云ふべき悼歌を、何のかゝはりもなくふと口遊むのはどうしたわけなのであらうか、

君あしたに去ぬゆふべのこゝろ千々に

何ぞはるかなる

君をおもふて岡のべに行つ遊ぶ

をかのべ何ぞかくかなしき

—— 蕪村 ——

蒲公英の黄に薺なずなのしろう咲たる
見る人ぞなき

雉子のあるかひたなきに鳴を聞ば

友ありき河をへだてゝ住にき

へげのけぶりのそと打ちれば西吹風の

はげしくて小竹原眞すげはら

のがるべきかたぞなき

友ありき河をへだてゝ住にきけふは

ほろゝともなかな

君あしたに去ぬゆふべのこゝろ千々に

何ぞはるかなる

我庵のあみだ佛ともし火ものせず

花もまいらせずすごゝとイめる今宵は

ことにたうとき

テーブル・スピーチ

阪 本 越 郎

保田與重郎君から手紙がきて、「ユギト」で誌上出版記念會をするから何か書けといふことです。「詩集西康省」は、九月下旬「四季」の集りの時に、田中の手から刷りたての、それを出来たてのほやほやを買つたので、記念會なら無論その料理屋のサロンに顔を出す一人です。さて晚餐がはじまつて、魚のフライでもつついたあとで、一人一人立ち上つて詩集についての感想とか祝詞といったやうなものを述べるのが順序です。この詩集の特徴を色んな人が述べるので、きいてゐて甚だ面白く楽しいのです。すると自分の番がやつてきて、ナブキンを膝からとつて立ち上ると、さて自分の云はうとしたことは、もう大概今迄に述べられてしまつたやうな氣がするのです。

その點、誌上記念會は、誰が何と云つたのか何を饒舌つたのか聲がきこえて來ないので大層氣樂です、前口上はこの位にして、テーブル・スピーチを始めませう。それが他の人の云つたことと同じやうで、案外つまらぬかもしれぬが――。

この詩集は近來稀な豊かな詩集だと思ひます。この豊かなといふ感じは、悪い例ですが、丁度支那料理のやうに品數が多くて、色んな味のものがあつたのです。その味を舌なめずりして仔細に味つてみると――これも品の悪い譬で恐縮ですが――田中君の過去、現在の全貌があらはれてくるやうな氣がするのです。僕はこんなに全貌的な或ひは全身的な詩集をあまり見たことがないと告白し

なければなりません。この詩集に田中君が實に全身的に打込んでゐる、その氣魄のやうなものが、ありありと感ぜられます。

最初の「公孫樹に寄す」から「俺は惡魔を……」ぐらひまでの十篇ほどの詩に、現在田中君が擱んでゐる境地の、その不拔の詩魂といふものに觸れるのです。それでゆうに一巻の價がある。それから「西康省」までが美しい歌口で纏められてゐる。「小鳥たち」以下の短章は、この詩人の初期の感性の麗はしさを蝶の標本のやうに並べてゐるものです。とにかく新しい詩人としてのメスの、*ヒゲ*への切口の冴えの見事さを見ることが出来ます。アレゴリイやメタフォアやソフィストケーションや等々、色々の要素が雜多に集められてゐるので、讀者を大いに樂しませると同時に、少なからず戸惑ひさせることも確かです。

併しそれにもかかはらず、彼の作品は素直で、簡潔で大綱を得てゐます。俗にいふ、つぼにはまつたものが多いのです。恐らくこれは彼の大膽とは反對な性格に據るものでありませう。彼の作品は位置の詩である。もう少し

し嚴密にいふと、彼の作品は殆んどすべて内心の告白でも、それを外界に假託して、一應客觀化してみるのです。さういふ客觀的な或ひは傍觀者的な態度が、彼の作品に特有の位置を與へてゐる。彼は別に哲理性いたものをのべてゐるのではないが、何か冷たい感じがするのはそのためでしょうか。そのやうに突離されてしまふために僕らが二重に戸惑ひを感じるのです。

僕一個の詩作の立場から申せば、西洋の詩はわれわれの思惟感情を透明にしてくれるが、より深化してくれないやうに思はれる。尤も僕い奴は、ボオドレエルもヴェルレーヌでもそんなものではないでせう。僕が惱んでゐるのは、われわれ日本の「もののはれ」の溫雅な詩趣にはぐくまれた者は、エキゾチズムとしてしか、さういふ西洋を感じるものが出来ないか、それとももう數歩深化した *Wahrheit* に達することが果して出来るかといふことです。田中君の詩集をみて、さういふ甚だエゴイステイクな見方からして、何かを求めたがるのです。かういふ非禮を許して貰らつてみれば、この詩集の最初の部分に、さういふ難關にぶつかつた詩人を見ることができます。

まことに痛ましいことですが、このことはこの國の眞の詩人の運命でありませう。そこからして、われわれは全く新しい思惟を準備しなければならないと、自ら戒心するのです。

安西冬衛と田中克己、これは興味ある詩壇の問題でありませう。前者は虛妄を愛する詩情をもち、後者は眞實を求める詩魂である。二つ乍ら東洋の圖形を心中に展げて、その圖形の上に重なる自己を計量してゐるのです。さて、どちらかといふと説明的にすぎる「西康省」をみて、眞實がどれだけ詩たり得るかといふ實驗は、そこに拂はれる浪漫心情の量に比例して成就すると思はれます。

僕らはあらゆる抵抗に向つて新しい文學の先驅でなければならぬ。前衛はこの日の文化の桶である。現代は文學にとつては、新しい準備期であるといふことが云はれます。それは明治の文學が残した生硬な翻譯語の整理といふことだけでなく、更に新しい精神のポイテイブな建設にあるのでせう。勿論透谷や「明星」の系譜を繼承することは必要であるが、それだけで終つてはなら

ないといひたいのです。明治のロマンチズムが西洋の世界に展けたやうには、今日の僕等は感激と憧憬にひたぶることが出来ない。昭和の日本には東洋の復興といふ新しい課題が出てきたのです。明治の科學者が西洋にみたものは、日本の國學が知り得なかつた合理の精神であつたが、シュブランガー教授が今日日本にみたものは、西洋的悟性が達し得なかつた倫理の精神である。森鷗外は彼の作品の中で、その主人公に己の智慧が足りないから、西洋から借りて來るのだ。どうせ借物をしてゐては自分で考へ出す人にはかなはないが、今は仕方がないと云はせ、そんなに西洋から借りてゐて、いつ返せるのかといふ問ひに對して、それは己の代にはむづかしい。子や孫の代にもどうか。何代も何代も立つうちには、返す時もあるだらうと云はせてゐる。この「自分で考へ出す人」の全然なかつたとはいはないが、それよりも西洋から借りる方が勝つてゐたところに明治の文化の必然があつたが、少くとも明治の文化精神の脆弱さも亦そこにあつたと思ひます。保田與重郎君が東京堂から近刊した「戴冠詩人の御一人者」の中で「明治の精神」を論じたたと

ろは、此の點に鋭く觸れてゐて、甚だ興深く讀みました
が、その中で「僕らの時代は自嘲から始めねばならな
かつた。これはまさに明治の精神がその消極面であつた
ゐたものの一部が、極めて露骨にあらはれたのであら
う。」と述べてゐます。僕らの時代は鷗外の云ふ「子や孫
の代」になつてゐるのであるが、西洋から借りた物の代
償に苦んでゐるのです。「石にひしがれた雜草」を書いた
文學者有島武郎の大正期の苦悶は、彼の死によつて解決
されはしなかつたのです。然るに西洋自體が苦悶しはじ
め、「文化の危機」を唱へたのが現代です。日本の詩人は
この現代のあらゆる抵抗に向つて、全く新しく文學を
考察しなければならぬ時期に、即ち目分て考へ出す時
期に到達したのです。

保田君は、明治の文化の中に、近代の最高のものであ
る藝苑を作るといふ精神を鷗外にみ、それ以上に上田敏
にあらはれてゐるとした。然しそれらの念願し企圖した
藝苑の建設は、「明星」のロマンチズムの消滅と共に失
はれ、絶望され、忘却されたと云ふ。だが、透谷から敏
に至るそれらの悲劇を過去とした現在、僕らの立つてゐ

る日本の世界的位置を思ふならば、僕らの詩人は新らし
い日本のために七轉しても八起しなければならぬ。今
日の日本は、新しい東洋の世界に存在することを自覺
しなければならぬ民族的契機に遭遇してゐる。それは
過去の、西洋の世界に入り込む以前の日本にとつて、東
洋が世界であつたといふ意味とは明らかに異ふと思ふの
です。そこに僕らの決意の新しい意味があると思ふの
です。さうして僕らのロマンチズムの新しい開花を
思ふのです。新しい東洋をイメーヂするため、西洋
へのロマンチズムがあつたし、今もなほある。東洋の
眞髓の繼承者としての日本が西洋へのロマンチズムを
もつたことがその發展の段階の必至であつたことを理解
しなければならぬ。この悲劇の道を進んだところから
僕等は仕事をはじめたのです。さうして、かういふ僕等
の深い否定の歴史が生み出した東洋のイメーヂが、今や
若い詩人の詩情に於て最も輝やかしいものとして生誕し
たのです。……

最後に一つ、田中君の全部ではないが、その技法の特
徴の出でゐるものを一つ讀み上げて、此の談義を終らう

と思ひます。「履」といふ題です。「くつ」と讀まねばなり
ません。

履

私は身に山椒の臭ひを帯びた蛇である
私の鱗は日を受けると金色に光る
それは闇では濃い緑いろとなる
私の腹には紅い縞が二條とほつてゐる
私は私の洞に天南星を植ゑてゐる
その花は私の洞をほの明るくする

その根を私は食物にする
私は四五日来嬰々をおもつてゐる
嬰々はおの窓の中にねむつてゐる
私はその紅い小さい履を見た
それは私が雀の卵をとり戸槌をつたつた時である
昨日は嬰々の婢に棒切れで擲られた
私は鱗を一部剝がれてゐる
私は復仇を誓つてゐる
天南星の根を噛んでゐる

晩食の後

——「詩集西康省」に就て——

津村信夫

初秋の一夜、銀座裏の料理店で久方振りに四季の會があつた。席上、田中克己君から、突然りつぱに出来上つた「詩集西康省」を手渡された。

私も心ひそかに期待してゐたのであつたが、手にとつてみると、何か不意をつかれたやうな、あまりの美事さで、實は惚々とした氣持になつたのであつた。

よき詩集を抱いて歸ると云ふものは、まことに楽しいことである。それは、瞬間自分の上にも何者かを加へ得たやうな晴々しい感慨である。

「青春」、「蛇つかひ」、「古驛」等々の短詩篇は私の記憶にも新らしい。ことに「青春」と云ふ一篇は不思議に私の

心を去らないでゐたものである。

とまれ、詩集「西康省」のなかにあつて、我友田中克己は諸々の試みをなしてゐる。敘事詩的才能も、抒情の美しさも共に感受し得られるのであるが、私にとつては、極めて簡潔な短詩のなかに、かへつて種々の要素を読みとれるやうに思はれた。

抒情の美しさときめてかかれぬこれらの短詩は、寧ろ、思想的な美しさにみちてゐるのではなからうか。

うっかり歌つてしまつたもの、さう云つた感じはいささかも起らない。周到的用意、意識された面、そして一つひとつの詩品の投げかける光は、智のやうにきらきら

と冴えてゐる。

讀者の側にまはると、これまた、うかつに讀んで、そのまゝ酔ふことを許されぬ。讀む方の側にも、何か心の準備や、氣構へを要するのではなからうか。しかしこれは決して表現の難易を云ふものではない。極めて適切な表現は一應素直に美しく受けとれるからである。

日常の人生に沿つて歌はれた詩篇、そのいくつかを私はこの詩集に於て見た。それらを讀んでゐると、過去の

詩篇の要素となつてゐたものが喪はれてゐる。それはもう諸々の要素を必要としない物に據つて詩を書く態度から一步脱け出た感じであつた。

今後田中克己をあるかせる道は、この平明の道であるかもしれない。この直接の道であるかも知れない。

私のもつとも注目するものは、やはり田中克己の現在の詩境である。

田中克己に（ある童話）

三十

芳賀 檀

正雄は、大變お月様が好きでした。好きだと言ふよりも愛してゐたのです。お月様から生れて來た様な氣がしたし夜窓の傍にねてお月様を眺め乍らねて仕舞ふといつても美しい夢を見ました。正雄はだん／＼お月様に似て來るねとお母様も言ひました。鏡で見ると、どうやら顔のあたりの圓みが、冴え／＼しいどんなに美しい心の子供だらうと誰でも思ふのでした。

併し正雄は何かしら悲しい様子をしてゐました。どうしたら、あの美しいお月様の様になれるかしら、と言ふ事が大問題だつたからです。ちつと考へてゐる日が幾月もつゞきました。正雄は何を心配してゐるのだらうと、みんなが心配しました。お父様はどれ顔を御見せと言つ

て正雄の眼の中を覗いたりしました。正雄は併し自分の腕のくびれを見てゐました。それは、よく赤ん坊の手首にある様な、こんもりしたやさしいくびれでした。ちつと見てゐると、どうしても、それが、何か遠い、美しい所から來たものの様で、どうやら自分の體であり乍ら、自分のものでない様な氣がしました。而してどこからか呼んでゐる様な氣がするのです。正雄よ、お前は私のものだ。而して、お前は大きくなればきつと私の様に輝いて、世界中の人から美しい人だと言はれる様になるのです。みんな眠れないでゐる様な淋しい人を、慰めてあげる様な、美しい人になるでせう。太陽の次の位に座つてみんなを救つたり助けたりする様な人になるでせう。

どんな豪い學者でも、王様でも、お前の言ふ事を聞きに來る様な立派な人になるでせう。女達はお前の爲に花束を編むでせう。ですから、お前は決して他（よ）を見てはいけない。ただお日様や、月や、光るものだけを、あの水の様な光りだけを御覽なさい。」

正雄は幸福でした。何とも言へない程幸福で、體中がもう光り輝くかと思ふ程、仕合せで幸福でした。餘り嬉しくて、夜もろく／＼寝ませんでした。晩く迄、お月様が朝の光りに消されて、白くなるまで、眺めたり、お話をしたりしてゐたからです。併しお母様は心配しました。日益しに澄き通つてゆく様なこの兒の將來が危ぶまれました。大變疲れるらしく、日が上つても、すや／＼と眠てゐる子の顔を眺めました。涙さへ、浮べてゐるのです。轉地しなければいかんとお父様は主張しました。何故なら、お醫者様も、このまゝでは助からないかも知れないと言つたからです。

併し正雄は大變仕合せだつたのです。而して或る日、輝く程美しい女の人が正雄を訪ねて來ました。一度も見

た。正雄を見るとほ／＼えみ乍ら斯う言ひました。「さあ、いよ／＼お月様へゆく時が來ました。仕度をおしなさい。」いつの間にかその女の人が手をひいて呉れて、二人の體はふわふわと空中に浮び上つて、高く／＼上つてゆく様でした。星が見る間に光りを増して來てぐるぐる廻轉するのが見えました。ある時はパチ／＼と音を立てて燃えたりしました。而して氣が付いて見ると月はもうかぶさる様に大きくなつて來て而も、益々大きくなつて來る様でした。正雄は恍惚としてゐました。

併し、大變な事が起りはじめました。正雄が月に近附くにつれて、今迄輝いて美しかつた月がだんだん暗くなつた許りか、今迄考へても見たかつた恐ろしい風景がひらけて來たからです。物凄く深い深淵が眞暗な口をあけてゐました。又眼の前に何千丈とも知れない高い山が聳へてゐました。山と言つても、いつも見る青い草の生えた美しい山でなくてたゞ切り立つた、恐ろしい崖と岩でギラ／＼と氣味悪い光りに燃えて化物の様にうづくまつてゐるのです。而してごう／＼と音を立てて嵐が眞暗な深淵から吹き上げてゐました。山鳴りがして、とき／＼

大きな岩が崩れては底知れぬ谷へ落ちてゆきます。落ち乍ら暗い壁に當つて火花を散らし、谷底には、惡魔の様な赤い火になつて燃え上りました。又空から時々ピュー／＼と嵐の様な音を立てて砲彈が落ちてゐて、大きな穴をあけたり、青い火を噴いたりしました。而して、誰一人ゐないのです。誰一人、優しい小鳥の聲も聞へず、牛が草を食んでゐる野原もありません。たゞギラ／＼した光りと、恐ろしい深淵だけが限りなく擴がつてゐるだけでした。

暫らくの間正雄はびつくりして聲も出ませんでした。たゞ慄へ乍ら、案内をして呉れた美しい女の人にしがみついてゐる許りでした。其の時、女の人は正雄に斯う言ひました。

「解りましたか。これがお月様なのです。唯美しい許りではないのです。何萬年となく火に焼かれ、水に打たれて、こんな荒涼とした姿になりました。併し遠くから見ると、あの様に美しい光りに見えるのです。永い間苦しんだからこそ、あんな美しい優しい光りになる事が出来ました。お前も美しいよい兒です。併し、世の中は

決して美しい事だけではありません。もつと／＼生きる爲にはお前は苦しまなくてはなりません。幾度も、本當に死ぬ様な苦しみをするのですよ。それから纏てお前は本當に美しい人になれるでせう。まだ／＼お前は人の世の中に立つて、いろ／＼な戦争や、民族や、本當に生きる事の苦しみ等を知らなければならぬのです。お前がさういふ暗い悪い出来事に出會つて、それを征服した後で、初めて人はお前を人の世の王様ともなし、太陽の次の位にものぼせるであります。萬人の慰めともなり淋しい人々の、暗い夜々を優しく輝やかすでせう。勇氣をお出しなさい。こんな月の世界の出来事に驚いてはならないのです。なぜなら、地球の上の人の世には較べる事の出来ない程の怖ろしい事や、暗い事が多いからです。而して、地球は、早くお前が大きくなるのを、待つてゐるのですから。」

ふと正雄は目を醒めました。夢だつたのです。氣がつくともうすっかり病氣が治つてゐました。林檎の様な頬をして床の上にとび起きました。窓から明るい陽がさし込んでゐます。(十、十七)

ニーベルンゲンの歌(三)

——ニベルンクびとの厄難——

第四 譚

シーフリート、サクセン勢と闘ふこと

さる程にグンテルの國に奇怪なる沙汰傳はりぬ。そはかねて憎惡を抱きありし外國の武士ども、遙か此の地に使者を差し向けたればなり。其の申條聞き傳へ、實にも一同が心曇りぬ。

此の武士と申すは、サクセン國の主にて身分高く威猛きリューデゲール、

竝びに丁抹の王リューデガストにて、兵を進めんとて夥多の精銳を驅り催しぬ。

服部正己譯

王府を出發する日は雪が止んで靜かに明るかつた。鶴が旗公署の門に一羽とまつてゐたが、すぐ堀をこえてとほく見えなくなつた。渡邊氏にもいろいろとお禮を云ふた。大沁塔拉の町ももう見納めであらうと城門を出てからもいく度となく振返へつた。喀哈河の凍結はまだ充分でなかつた。僕も車から下りた。下りてみたがどうしても歩けなかつた。仕方なく助手臺に再びのつて河を渡つた。下窪をすぎて山にかかると雪は一層深く走るのを困難にした。車と車との距離が大變のびてきた。前の車が雪の山をこえるかけがはつきりとわかつた。そして車がのぼりつめたとき次の車が山をのぼつた。さうせねば危険だと云ふのであつた。日没のとき、前の車が雪の中に滑つた。號笛のしらせですべての車がどきどきに停車した。運轉手たちは車輪のまはりの雪を交替して掘つた。僕は雪の上にうづくまつてそれを眺めてゐた。形容できない文字が雪の風景をひろげてゐた。そして太陽は向ふの山の頂に沈んでゆく。最後の火華がはげしく雪を掘る人たちと車輛とを照した。僕の運轉手の額には大粒の汗がいくつもきらめいてゐた。雪の上には服が無難作に脱いであつた。太陽は次第に小さく沈み、妙にいびつにゆがんできたやうに思へた。雪までが紅くなつてゐた。そして來光のやうな輝かしい風景。殆んど陽が沈みかけて一きは明るくなつたとき、山のいただき低く雁が八羽列をなして太陽のまばゆい偉大な光束の奥に消えていつた。

感想

伊 東 靜 雄

田中克己君の詩が約七年前コギトに載り始めた頃の酔乎たる新鮮さは、忘れてゐない人も多からうと思ふ。それは當時の世の詩風を一轉さす底のものであつた。その頃新しがりやの一種の詩風が行はれてゐて、その連中は輕薄にも田中君を自分等の仲間と思ひ誤つた。それは見てゐて滑稽なことであつた。田中君は本質的に彼等の一番の敵であつたからだ。田中君の詩の言靈をよみ取るものはすぐそれがわかつた。その新しさは、自立した詩魂のいつもつ烈しい新しさであつた。田中君の詩には左顧右眄したものがない、醜態なものがない。詩作に口實がない。従つてそれをよむ者に、同じやうに自立した詩魂を強く要求する。わたしもそれを強ひられた一人であるコギトの友人らは皆多かれ、少なかれさうだ。わたしの年少な一友人は田中君の詩を評して大へんこはいと云つ

た。尤もなことだ。それは模倣を烈しく斷はつてゐるから。然し田中君にも機嫌のいい時はある。そんな折、てにをはに充分餘裕のあるはにかみの表情をわざとする。それが作品を瀟洒に見せたり、輕やかに見せたりする。又諷刺に似た武器のはたらきもするし、人を反撥もするのである。そして友情でなく、好惡がそこに生ずる。わたしもかなり永い間そこにひつかかつて付き合ひが充分樂とはいかなかつた。しかし田中君の詩はその彼方にいつもちゃんと獨り立ちして、凜乎としてゐる。これは近來有難いことである。三好達治氏が田中君のいゝ理解者の一人であるときいてゐる。成る程のことだ。七月の終り頃大阪を見捨てた君の詩集が、九月の終りについた。わたしも大阪に倦きた。

私信代りに

中 島 榮 次 郎

君の第一詩集「西康省」をいたゞいて有難う。早速通誦してゐます。「支那」から最近のものに至る迄、一見變化様々のやうなれど、少しも變らぬ一貫した君を感じ、今更ながら瞠目しました。君は意識して變貌することは極力嫌ひだといふ潔癖をもつてゐますが、さういふ當世はづれの偏見を除いても、君は恐らく變化せぬ人でせう。君は既に「支那」を書いた時に己れの資質を見破つてゐたこととせう、そして既に君の資質の頂點にあつて君は苦しかつたことだらう、早晚書けなくなる詩許りであるやうな氣がします。

君は他人が考へる所を感じた、他人が感じるところは見た、他人が見る所は捨てた、他人が捨てる所は……いや捨てたりしてゐては巷間あんなに澤山の詩が現れるものか。そして君は詩をかいいた、詩を書く君の心に何かあつたらうか、恐らく何もなかつたらうと想像します、痼性——恐らく保田の使つてゐる言葉のこの「痼性」が、君にとつては感性だつたのでせう。だから君の場合、感性も君自身も責任は一切ないわけで、責を負ふべきは君の中の何もない心であつたのでせう。その詩は誰よりも君自身にとつて苦しいものであつたに違ひない。君は文字

通り詩を「書き捨てた」。一切の責任は君の空白な黙りこくつた心にあつたわけです。その代り君の美事な詩の價値も結局この空白で黙りこくつた心にあつたわけです。

僕は君の詩集を通誦して、君の一等落ちついてゐる時の顔をその底に感じました。君は君の苦しみさへも君の痼性で虐殺した、そして現れた所はよく見れば何たる平靜、何たる奇妙な透明か……そして恐らく誰にも君の詩の平靜と透明の謎は分らぬこととせう、まして僕にも想像はつきませぬ。君の痼性の底に沈んでゐる最も落ちついた君の心といふものはどういふものであらうか。君が朝になつて眼を覺まし、果して自分のやることが本當に何かあるかと考へやしないだらうか、そしてさう考へたとしてみて、その上で君はどんな顔つきをするだらうか……僕は考へてゐて怖しくなつて来る。しかしそんな怖いところは皆さけて通つてゐる、みんな知らん顔してゐるやうです。……ゐなければ生きてられますまい。西康省をかいいたとき君は最も自由な自分を恐らく感じたこととせう、少くとも君の心は一等樂だつたでせう。君の心は西康省へ行つてゐたから。君の心は呟く、*Dichtung*

私信代りに

und Wahrheit 。

そして *Dichtung und Wahrheit* と言ふ心は恐らく何にもない空白なものでせうが、何にもないのではなくて「結果」として何にもないといふで心せう。——恐らくその後君のかいいたものは殆んど全てが「西康省」でせう。「ある日僕に」君はかいいた。「泉の聲は小さく、海の笛は大きくて、君の眺めてゐる物がきつしり君の心になつたのでせう、君は自分の眺めてゐるものより多くも少くもない心を持つたのです。「何か悲しくて、退屈で……」と君は最近歌つてゐます、詩句なんか問題じゃないのです、僕はこんな場合美事だなんていふ言葉を使ふのはそらぞらしく思ひます。

一週間に會つてゐた君と別れてからもう三ヶ月、何やかや割合忙しく暮してゐます。そしてともかく三月たちました。海を越えてこの文章かく積りでしたのに、今かうして自分の部屋でかいてゐる、……何もかも自然です。僕は自然を信じます。何はともあれ心から君の出版を喜びます。さよなら。

讃歌

美しい五月の朝風は、アポロンよ、あなたの國希臘の花の香がする。今日、あなたの光榮を讃へる詩人が遠く三千里、青い海、赤い海の彼方、東方日本の島に生れた。花束をこしらへよう、ヘラスの誇りであり、あなたの愛し子であつたヒヤシンスの花束を。その花は彼に相應はしい。眞白な食卓の上に設置せられた精巧な地震計、その針は今微妙な痼性に慄へてゐる。それは何を示

三 浦 常 夫

し、何を計るのか。誰も知らない無限の時の流れの底にあるもの、人間の未來のあらゆる喜びと悲しみ。風よ、あかるい朝の光のなかに、これらの小さな言葉の寶石を撒き散らせ。さんらんと、言葉よ、隱微に光る愛の天體よ、傷き惱める人の世に慰めと息ひとを與へよ。銅鑼、鐘鉢を鳴らせ。乳香を焚け、沒藥を薫ゆらせよ。今日は日本の詩の祭典である。

詩集西康省

薄 井 敏 夫

田中克己の最初の詩集西康省が出版された。それはまことに當然なことであり、寧ろ其の發表される時期の遅れてゐたことを遺憾としたい氣持もするのであるが、友人としての悦びは此のうへないものがある。その悦びだけを此處に書きたいのである。田中がどれほど純粹な詩人であるかといふこと、その田中の成長が今までの私にどれだけの悦びであつたかといふこと、これからの私にどれだけ力づけるだらうかといふこと、さうした公私の

事柄を書きそへてみても、そぐはない氣持がする。田中の詩人としての價値をあげつらふことは、詩人先輩諸氏にお任せしたい。まして田中との私的な交遊の経緯を書きしるす場所とも思はぬ。唯、私の今したいことは、田中の詩集の出版を悦ぶ純粹な氣持を、此の紙面いつばいに書きあらはすことである。田中克己のあらはした美しい詩集を、手に觸れ眺め得る悦びを、心ひとつで歌ひ出すことである。

三月の糧

松田明

氣候の不順のせゐか今頃になつて櫻が咲いてゐる。秋爽といひ颯涼といふが秋晴れの空に櫻の花の咲いてゐるのは美しいといふよりも不氣味である。と思ふと今度は連日の雨つゞきにこの冷え加減だ。頃日珍らしく腸をこわして臥せつたので、そのひまに田中克己から贈られた「詩集西康省」を開いて見たら眞ッ先に次の詩が目についた。

鳶

俺はとぶ

日はすでに傾き風が強い

感情が昂ぶつて弧が旨く書けない

冷い虚空で

俺はひとり言をいひ

涙を流して――

獲物にまつすぐに墜ちかゝる

(詩集 西康省)

僅かな月給をもらつて得る安易な俸給生活が癖になつてしまふと、つひ何かも臆病になつて、昨日も、一昨日も、その前も何もしなかつたといふやうな日が重なつて、時々それを氣にしてゐる者にこれは少々痛いぞと、僕は僕なりの感じ方で思つた。

別に怠ける積りではないが、規則的に時間に縛られて

見ると、それだけで肉體的の疲れも相當なものである。その日きりの思惟がぼつんと何の連絡もなしに感情のまにまに揺曳して、おまけに感情にむらが出来て、つひ機會を逸して仕舞ふ。「涙を流して――獲物にまつすぐに墜ちかゝる。」――しかしこの激情こそ彼の決意である。疎然としたきびしさである。今になつて僕は、はげしい雨の音に聴き入りながら、自分の獲物に身構えをする決意にせまられるのである。

正直ものゝ、潔癖で、癩性で、物知りで、詩がうまくつて、口がわるい――僕が知つて以來からの彼であり、わざわざ僕にも自著を贈つてくれる親切さである。「何よりも先づ小説を書き給へ」と下手糞な僕を勵ましてくれる數人の友の一人である。しかもさうした激勵がなければ奮ひたてない自分が忌まましものである。

田中の風貌を、僕の知つてゐる阿佐ヶ谷で、高圓寺で東京の市中の景色を背景にして想像してゐる。しかも僕にはそれが數年前の東京の生活の追想にすぎない。彼にはそれに引續いた大阪での四ヶ年の生活がある。そして再度の上京によつて「詩集西康省」を世におくつた田中は

それだけの時日に大きなしるしを止めてゐる。「千里に適く者は三月糧を聚む」といふ。大阪での四ヶ年は田中にとつては糧を聚める時期でもあつたらうが、その時期の集をこゝに見ることのできるのは嬉しい。この書巻首のこの道を泣きつゝ我が行きしこと我がわすれなばたれか知るらむは美しい謙辭である。

そんなことを考へてゐたら、同じ日の午後、松下武雄の他界の速達に接した。暗澹たる思ひであつた。この速達を本の間に挟んで、兩腕を組んで枕にして暫くゐた。昨日訪ねて來た、これも高等學校以來の友人のKも最も身近い人にならうとする人を最近喪つた。その悲しさを矢鱈に押しかくさないとところに眞實なものはつきりして同情される氣持だつた。今夏來、親戚の幼児、中學の友人の訃音あり、我また腸を病んで臥す。身邊とみに蕭條といった感じである。病身をいためつけてさへも大きなものと取つ組んでいつた松下と、生活の安易な道を斷ちきつてまで上京して行つた田中に共通なものを感じ、その共通なものに身の引きしまる思ひがした。

すぐれたる詩業の成就

——「詩集西康省」の著者に——

山國甲斐は既に秋深く今宵は殊に月が美しい。富士の頂きを彩る處女雪が輝くやうだ。きみの實り豊かな第一詩集西康省への祝辭をしたためるにはふさはしい夜である。ただ遺憾なのは僕は詩に昏い。僕の祝辭は却つてきみの聲を招きはしないだらうか。ひとりひそかに恐れるのである。しかし世路の繁累に日毎に俗化しつつある僕が些の嫉視反感を抱くことなしに、心よりこのすぐれたる詩業の成就に讃嘆の拍手を送り得ることは即ち、きちに對する誠實なる尊敬と愛情との結果でなくして何であらう。僕の安んじて祝辭を贈る所以である。

船越章

詩人は成るものではない。生れるものである。この言葉は誰が云つたのであらう。ともあれきみは古言の徒らならざることを一卷の「詩集西康省」によつて證したのである。思ひ見よ、十年の詩業の一斑を採録したこの詩集に一の惡作を含まざることは、きみの資性のなみなみならざる豊かさを示して余りあるであらう。誠に詩獄は攀るに難い。困苦して登攀を期するも凡俗の到り得可き頂ではないのである。然らば何が故に世上、「詩人」の氾濫があり、「詩集」の洪水があるのであらうか。これを要するに至難の道は至難なるが故に一見容易なるが如き面貌をなしてゐるからである。眞理は恒に平凡なすがたを

してゐる。悟るに難い所以である。と同じく詩を「生む」ことは困難である。しかしながら文字をある形式によつて連ねて詩と「稱する」ことはたやすいのである。非詩の横行盛にしてまことの詩人寥寥たる所以なのである。この間に、きみが十年の昔、年少既に自家の詩境と表現とを確得したことは、讃嘆すべく慶賀すべき事實であつた。きみの詩人としての自覺がいつであつたか、僕は知らない。もし、きみの自覺がきみの作品に先行したとしたならば、きみは自覺せる詩境を確實に把握し切實に表現し得る才能を具へてゐたのであり、作品が自覺に先行してゐたとしたら、少年既に詩獄の最高近く在つたのである。いづれにしても早熟驚くべきものがある。僕の言を怪むものがありとすれば、僕はたゞこの詩集の含む最も古き作品「支那」と「天上有事」とを取つて示すであらう。

さて古來、年少にして高科に登ることは不幸であると云はれ「早熟」なる言葉は暗々裡に「早衰」を豫言してゐるのである。然しながら、きみは見事にこの通説を打ち破つて不斷の進展を歴然たらしめてゐる。喜びに堪え

ないのである。詩人は生れると同時に刻苦すべき運命を持つ、確かに才能の額を示しつゝ遂に一絃斷つて空しき才子の數々をわれわれは耳にし目にする。資性才能を刻苦によつて磨くことを怠るが故である。まことに詩人は生れる。が生れたるものは進まねばならぬ。資性才能のみを以て満足するとせば墮落の一途をたどるのみである。斯の種の怠惰なる人々の數も亦、その安易なる作品とともに所謂「詩壇」に充滿してゐるのである。かかる陷穽に對してもきみは敏感であつた。刻苦は變貌を意味する。脱皮を意味する。きみの詩境はその表現とともに恒に流動して停滯することを知らぬ。流動は進展である。同一地點同一平面に於ける對象を異にするのみの足ぶみでは斷じてないのである。一作は一作より高く淋しく孤獨の極北が遂にきみの安住地であらうか。日本の抒情詩の傳統は、異常なる動亂の今日に在つて一卷の「詩集西康省」の著者、瘦身のきみの肩に在ることを僕は敢て言明し得る喜びを持つ。自愛を祈ること切なるものがあるとともに、今更に敬重の念禁じ得ぬものがあるのである。

支那事變を契機として東洋と西洋と云ふ大きな問題がいろいろの角度から論じられてゐるやうである。僕はあゝ種の人々が云ふやうに西洋の思想文藝には採るべきものがないなどとはもとより考へてゐない。われわれは過去にさうであつたごとく、いや、それより以上に西洋の思想文藝の眞髓を掬むことに吝であつてはならないと同一く信じてゐる。然しながら、それと同時に、或ひはそれ以前にわれわれはまづ目を東洋に向けねばならない。と云ふよりわれわれは東洋に、そして日本に、その輝かしい傳統に殆ど無智であつたのではなかつたのか。僕は顧みて低く頭を垂れるのである。われわれは日本の傳統に謙虚に愛情を以て接しなければならぬ。愛情を持つと云ふことは、無批判になれと云ふことではない抽象的に大聲呼號することではもとよりない。……

僕はきみの詩のなかに東洋に對する——歴史、思想、文藝を含めて——深い知識と批判とに裏打ちされた愛情をしみじみと感得し、云はでもないことを云つたやうである。が同じことは特に範圍を限つて云へば、西洋の近代詩に對するきみの態度、延いてはきみの作品への影響に

も同はれると信じてゐる僕である。要するに僕はきみの中に、東洋と西洋との握手を感じるのであるが、きみはあるひはより東洋の傳統精神を愛してゐるのではないだらうか。西洋近代詩にも稀にしか見られぬ新しいエスプリに満ち溢れた珠玉の數々を一色黒き和装に蒐め收めたところに、東洋の傳統に孤高の精神をつなぐきみのすがたを思ひ描くのは僕の偏見であらうか。

僕はこの頃、譯本によつてステファン・ツワイグの「知性と感性」とを興味深く讀了した。ツワイグはスタンダルを以て、自らの心の中に知性と感性とを比類なく調和し得た個性人として、その面貌を明らかにしてゐる。僕はきみの作品の中にも知性と感性との美しい平衡を感じてゐる。が一讀、人を打たずしては止まぬきみの感性の美しさがあるひはその底に近代の憂思を秘めた比類なき知性人の在ることを見忘れさせるのではなからうか。こゝにきみに對する誤れる評價が生れはしないであらうか美しき感性のなすわざである。

きみの詩のもつ傳統とのつながり、今日の日本詩壇に於ける位相、泰西近代詩との相關等、なほ論すべき問題は多い。凡て僕の手之余の問題である。僕は筆を捨てねばならない。さてふり返つて僕は何を書いたのであらう要するに僕はきみを敬愛し、第一詩集西康省の上梓を心から祝福すると云ふことを云へばそれでよかつたのである。このことをさへ信じてもらへばこの一文は凡て云はでものことであつたのである。——さうさう、きみはいつか「ヨギト」の詩時評で愛される詩人と其の對蹠をなす詩人について書いたことがあつたね。さてきみはど

ちらだらう。人は簡単に愛される詩人と云ふかも知れぬ僕はさうは思はない。きみの作品ほど一見ひとの愛を求めらるやうでゐながら他面これを極度に反撥するものはすくないであらう。否定の精神ではない。孤高の精神である。僕はいまにして、きみがきみの第一詩集の巻頭に「この道を泣きつゝわれの行きしことわが忘れなば誰か知るらむ」と題したことを思つて涙ぐむのである。人は手をさしのべるであらう。きみは必ずこれを拒まねばならぬ運命を持つ、孤高なる人の持つべき宿命なのであらう。さうなら。僕はこよひ寝ねがたい。自愛を祈る。

文學史的な感銘

保 田 與 重 郎

「詩集西康省」をテキストとして、詩人田中克己を語ることは、私には大へん難しい。田中の文學は、作品としてよりもつと具體的に私らの仲間の中に生きてゐる。何を憤り何をふくみ、何を反撥し、何を拒絶してゐるのか。さういふ詩の背後にある思想とか、又は時代的地盤——笑ふ勿れ、文藝評論が文壇に於て獨立するためには、久しい間講壇の云ひ方が必要だつたのだ——私はそんなことを云ひたくはない。何人かの日本の職業的思想業者の語つたのに比べては明瞭ではないが、正確にして、複雑な現代の最も立派な若者たちの、純粹な心の様態の變移が、こゝには抒情詩として歌はれてゐる。日本紀元二千五百年代末の頽廢面は、日本の若干の拔群の青

年によつてその既倒を支持された。田中克己はまさにその拔群の人々の中の優秀である。萩原時代以後の詩の時代の頽敗を今日にもりかへしたのは、大半田中克己の一人の價值がなしたのだ。歌の代りに叱聲怒號が詩であつたり、聲調の代りに標識記號が詩と認識された時代を、詩の精華の原始にまでひきもどしたのは、どの天才たちの努力より田中の價值であつた。唯物美學と民衆詩時代のなかで、田中がその出發にあたつてかいた詩は、「支那」とか「天上有事」、「履」、「オルフェエ」、「晝」、「巨」などである。「詩集西康省」中の「西康省」以下に組まれた前期作品はさういふ意味で、私には大きくいへば文學史的な感銘を味つた記憶をもつてゐる。「晝」といふ詩は、

私にその時代に於て時代の若者の人心を千萬言を以てするより巧みにうつして、まことに詩の所在といふものを教へてくれた。私は感嘆した。私は感心したが、それよりも多く教へられた。

コギトに詩をかいいた人々の中で。特に私は、田中と伊東靜雄と萩原伸二郎を尊敬してゐる。この三人はコギトに詩集一冊分になる分量の詩をかいいた。さうしてこの三人の三様の氣質がつくつてくれたコギトの詩風は、昭和の詩壇を變革した唯一の文學運動である。輝かしい價值はつねに發見される。田中も、伊東も、決して不遇でない。人々はその詩の價值と共に、歴史に對してなした意義をも共に認めたのである。田中に關して私は個人の傳説を書かうとはしない。それに耐へるまでに彼はまだ存在そのものが形式をもつてゐない。さういふやり方は彼を小さくし、彼の詩を弱めるわるい文壇的風習である。個人生活なら、その詩にあらはれた個人生活の反映を寫したらい。日本の詩人に於て一切の傳説創造に耐へるのは、まだ當分の間は萩原朔太郎一人である。

田中はこの夏の初め大阪の方の仕事を放棄して我々に

豫告なしに上京した。さうして「詩集西康省」を出すのだと云つた。私は人のなし得ぬこの嚴然とした、反常識の態度に大へん感銘した。それから私は校了にされた假刷稿本をよみ、たつた一つの誤植を發見した。

コギトに發表されるときに私は、その作品をよんで、しばしばやりきれない氣持に陥つたことがある。私は楽しくないことの方にも多くひかれた。しかし今本になつてみれば、それらすべてが詩である、詩であるといふより一貫して歌つてゐる詩人をうきぼりにする。私は樂屋も考へず、こちらの私生活などから考へる必要はない。愚鈍にしてしかも高慢な私さへ、この本を見てやはり己は聲にならない詩人であると思つた。實に口の中でいはれてゐるべきことさへ、こゝでは外へ出る表現をもつてゐる。私は、おまへはかういふことをどこで考へてゐるのだ、そんな馬鹿なことを田中にきくほど、自身を虚しくしてゐる時がある。

私はこの本を手にして嬉しい。こゝにある立派なものは第一に詩である、次に趣味である、次に神經である。私は神經に一等怖れる。さうしてこの本にきつと私は田

中より喜んでゐるだらう、自分の本はあまり嬉しいものでない筈だ。田中の作品が、その處女作よりあぶなげのないものばかりで、つねに信じられたといふことを、私は去年の早めごろ肥下とも語りあつたことがあつた。失敗作は失敗作としてやはり田中の作品なのだ、このことは稀有のことである。節度を知る人の態度でなく、文藝に於て恥を知る人の態度である。私はこのことは日本の表現藝術史上を一貫した要素と思ふ。表現藝術史上に於て恥を知らない場所で未曾有に廣大な完成をなし上げたのはたゞ豊臣秀吉一人きりである。しかし今日では詩人にさへ、大小説のやうに文藝的な恥を知らなさすぎる傾向がある。かういふ傾向は今日の國策に一致しても、邊境を遠征する「日本」のロマンチズムには決して一致しない。日本のロマンチズムは、秘かに軍舎の軒下に草花を植ゑてゐる、それを知られることをむしろ兵士たちは恥しがつたのである。

田中の文學の背後には、現今に於ては珍らしい日本の歴史と古典の造詣と共に、西洋の美觀に加へて、支那藝文の素養が藏されてゐる。田中は和漢洋の藝文に才人の

如く遊び、しかも村里の篤學者のやうに學ぶのである。さういふ知識が彼の詩に於て何の邪魔でもない。大學の美學觀論が日本の文藝評論の流行に寄與して、發達を邪魔したやうな馬鹿らしい事情は、さすがに詩人にない。思想を歌はうといふやうな愚劣のことを一度も考へなかつたから、さういふことを云ふ時代と人の精神の歴史を、抒情詩の側でとらへてゐる。公認されてゐた空隙をつねに反撥していつたやうな青年の聲が、一つの詩になつてゐるとさへ見える。

純粹とか、正義とか、美しさとか、この抒情詩を特色づける概念であるが、詩はさういふ概念と完全に無關係である、何となればそれらの田中の對象が詩となるには、詩人田中克己だけが必要だからである。しかしすべての抒情の影に、病的にまできびしい潔癖と痼性の振動を見たものは、そこに又正義と批評と判斷のわびしさを見るだらう。さうしてそれらの田中の趣味の一貫する對象が、又すべて田中の存在のまゝに一つ一つの餌食にすぎないことを見落してはならない。

「詩集西康省」は今日の文學の擔手の變革を暗示する

一つの實證である。一切の文學領に於ける、日本の遠征の一つの象徴物として、我らのまへに嚴然として存在する。今日の詩をのべるものはまづこゝに一人の年少の天才の相貌にふれるがよい。

半年の日本文學界を一らんして、驚くべき國策順應時代の出現に驚いた私である。私はこの半年餘り、全然文藝雜誌をひらかず、この度始めて既往半歳のそれを通覽した。作家は「國策順應」を文學の安住地として、すさまじい大小説をかいてゐる。その中で私はその期間のゴギトの詩の變化の徐々としたものを知つていさゝか昂奮した。それだけが好ましい。けふの日本の理想をうつすこ

とは、國策を文學に反映するだけでない、文學者は文學の機能をすてゝはならない。内地にも戦場にも怖ろしい淵があるではないか。その底のない淵を基礎として、二つの現在をまたげる壯大な空中殿堂をきづくロマンチストはゐないものか。しかし今日の文學を知るためには、そんなことは別に、今日と明日に於て一等文學であるものを、例へば「詩集西康省」などを通じて感得すべきである。この天才の近代畸形から縁遠い近代の歌は二千五百年代の末期に於て、次代の曙に通じる最も美しいものの一つだからである。

めて示唆に富むものであらうと思はれる。觀念のしこりのとれた、しかも西洋人らしく肉の勝たない丁抹スカンデナビヤの文學はフランス文學と同様私たち日本人にとつては親しみ易いものであるがこの北歐文學はもつともつとこの國に紹介されてもいいと思ふのである。私たちの精神にとつても生活にとつても極めて有益である。英米文學やあまりに尠大なロシア文學や醜惡強烈すぎる南の文學は日本の文學をこはしたり矢鱈にあせらしたり滑稽に力み返へらせたりする恐れがある。ドイツ語その他を解する人々がもつともつと北歐文學を紹介されんことを望む。フランス文學が偶から偶まで紹介されるのは結構なことだらうが、北歐文學もそれくらゐ待遇されてもいいものだと思ふ。ヤコブセンに戻れば、この他、これまた他の人たちがはにかんでか誰も表現してゐない若人の持つある甘く愉しいもの、ヤコブセンの持つ明るさばかりをみせたやうな「こゝならば薔薇の花咲かん」イロニーの「異國人」、また「イェンス夫人」のなかに描かれた人の魂の

觸るべからざる高貴さ、聖なるもの、それに觸れらるることを觸るることを恐れて顫へる純にしてストイックなばかりの魂などまことにヤコブセンならでは見られないものである。失へる戀の胸の傷に母にさへも觸れられることを恐れ拒む乙女のはげしい清高さ、偶々昔の戀人に遭つた母の感情におののきながら對してゐる姉弟、觸れらるるには觸るるにはまことに慟哭以外に腹を切る方法のないストイックな烈しさ、私はなによりもこのストイシズムを愛してゐるのかも知れない。清らかなもの聖なるものを死を以て守るストイシズム、ストイシズムが笑はれた時代は過ぎた、そして私自身ついにストイシズムの子であることを自覺する。ストイシズムと繊細な心一わが花。尙、ヤコブセンについては私のしつくりこないものや嫌なものもある。繪畫的な私にはヤコブセンの彫刻的なところがしつくりしない。こはらしく窮屈な氣もする。リルケはロダンとともにヤコブセンのこの實に細かに浮彫にする寫實を例へば「モウゲンス」などに於ても感心したら

しいが、私は「モウゲンス」を譯しながらそのこの種の細かさには時にはうんざりすることもあつた。會話なども讀者には不親切に現實の一部をそのまま持つて來たといふやうな彼獨特の現實的にみせるためと苦笑しつつ察せられる策略も時には神ならぬ身なれば少しどうかと思ふところがあつて讀者を戸惑ひさせるものと思ふ。又、ヤコブセンにあるボードレールにみられるやうな一種の中世的陰慘さをまじへた執拗さは私は好まない。薄氣味悪くまづはりついてくるしつこさである。私がむしろ軽く淡白な氣質だからかと思ふ。ボードレールに於てもこの執拗さだけは嫌である。「モウゲンス」を譯すときは晝休みなどによくその頃まだ文部省にゐた石中象治氏に語學の相談に行つた。氏は大變几帳面で親切な人で、あるときどの辭書にも見當らなかつたベルレントといふ鳥の名についてなど私がもう忘れてゐた頃に電話で教へてもらつて最初何のことか分らず失禮したことがあつた。たしか何とかいふ鳥の種類に屬するものであつたと思ふが、また失念してし

まつた。しかしあんな電話が鳥の名のことで使はれたことはないことであつたらうと思つてそのとき愉しい氣持がした。しかし、文部省によく行つたのは語學の相談が目的であつたか文部省の食堂が目的であつたかは分らない。文部省の食堂の南側の窓から南東の眺めは恐らく官廳街唯一の美だと思ふ。緑の蔭の生えた小さな四角な建物やブランコや温室のある花園や、背景のビルディングや青い空や、電線や、あそこをタイピストなどが歩いてゐるのはいつもは實用的な感じが先立つて興味を惹かないかの女たちもすつかりロマンチックなヴェイルに掩はれて、その服裝によつて或はフランスのシャトーの美しい令嬢のやうに或は英國貴夫人のやうに見える。それをながめながら私はタバコを吹かすのである。銀座の汚い喫茶店などへ行つていかにも生命が充實したやうな顔をして歸つて來るのよりもよほどいい。私はさうしながら、文部省には友人が相當ゐるはずだ誰か見つけて話しかけてこないかなと時々考へる。しかし未だかつて誰も見つけな

い。かういふよい時には私はチェリーのやうな安タバコはすてて斷然ホープを吹かしてゐるのであるから、ホープ一本にあづかるためにも誰か見つけて來ないものであらうか。

詩集西康省あとがき

田中 克己

この詩集は昭和七年から今年まで七年間の僕の詩の三分一ばかりを集めたものである。詩の數五十六、頁は百頁ほど、本文には土佐の手漉の紙、表紙には鐵色の越前島の子紙を用ひ、和綴ちの體裁を採つた。何うせ表紙はをろか、天金も金文字も使へないし、大して凝つた装幀も考へ出せさうもないので漢詩集以外には餘り例を見ない和本にしたが、そのた

めこれを受取られた方の中には保存に苦しまれる方もあらうか。この詩集にのせた詩は前述の如く五十六篇、中にもコギトにのせたもの廿六篇、四季にのせたもの十一篇と最も多いのは兩誌に僕が同人であるせいで、その他には「催眠術」と「琴唄」が静岡縣富士町の加藤一氏の出してをられる海盤車に、「零落」「古典」が日本歌人に、「歌唱」が鶴に、「祝慶」「悲劇」「懸崖の上で」がセルバンに、「掌」が季刊文學に載せたものである。コギトの詩は總計百篇以上ある中から選んだが自分では勿論作の善惡などわからないうへ、實は二度と見るのもいやなものばかりであつたが、強ひて何かの意味で自分の思ひ出を誘ふやうなものを採つた。従つて概ね自分個人の事情がその製作に伴つてゐる。その中いくらかをしるしてをくのも良いかと思ふ。

先づ題名であるが、これはお氣附きの如くこの集中、最も長い詩の題をとつたので、これも物臭い僕に似つかはしいことだと思つてゐる。はじめの歌は實は高等學校三年のころの作であるが、保田

編輯後記

十月九日松下武雄の訃報をうけた。しばらく大阪の近郊に養生してゐて、病勢のほどはあちこちからきいてゐたのであるが、このやうな急變にあふことは誰も豫想しなかつた。

松下はコギト創刊以來の同人で、我らにとつて早十年を數へる友であつた。悲報をきいた深夜、肥下、田中、保田の三人が集つて故人のことを語りふかした。

コギトのしてきた仕事を考へても、私は松下を思ふことが深い。「大なる」といふ形容詞は特に松下にふきはしいことであつた。松下の一等根氣よい仕事の一つは、あのシェリングの藝術哲學の翻譯である。第十四號以來つゞけられたもので未完になつた。その間巷間にあらはれたその一部の翻譯書は、松下の完成した部分だけを本にしたのもで、この大部の世界的古典の翻譯は我國に於て初めてである。

コギト創刊以來彼の草した藝術論も多く、詩歌の類に於ても少くない。我々は

彼の仕事を顧み、その價值を定めることを又我らの任務と考へるのである。やがてその眞價はひろく知られるものであらう。彼の發表された最後の作品は、コギト七月號に出た短歌である。

肥下恒夫は松下武雄の訃報をうけた翌朝に下阪し、今度の號は、田中、保田二人の擔當となつた。松下の遺稿は、肥下歸京後になるだらうが、とりあえず次號をその追想號にあてたいと思ふ。

今號は田中の近刊詩集の祝賀號である。その「詩集西康省」の價值については、諸氏の文章が明らかにしてゐる。これが最近文壇にセンセーションを與へた詩集であることは、當然である。

眞田雅男の「雁」は先號の「蒙古」と共に美しい文章の隨一である。池澤茂の散文も詩人の散文らしい佳品である。日本の

文學が一樣に大小説時代の空虚さを作つてゐるとき、我々はかういふ深い睿智を底にたゞへた文學を、日本の美觀の傳統のために尊重する。(Y)

轉居 東京市中野區方町一の九一九

保田與重郎

東京市杉並區天沼三の七八八

田中克己

コギト第七十八號(毎月一四)

昭和十三年十月廿七日印刷納本

昭和十三年十一月一日發行

東京市中野區大和町二五二番地

發行人 肥下恒夫

東京市麹町區麹町五丁目

印刷人 杉田彌太郎

東京市麹町區麹町五丁目

印刷所 杉田屋印刷所

東京市中野區大和町二五二番地

發行所 コギト發行所

振替口座東京八四九六一番

定價 一部三十錢(送料一錢五厘)

價 六部一圓六十錢(送料共)

大賣捌所 東京堂 北海堂 大東館

田中克己著

詩集西康省

新刊

田中克己は私の十年の友である。その年少の天才の發露は又私の長い暗々の教導であつた。あの繊細な癡高い振動を記録した一切の文業は、我らの年頃の日本の若者の匹敵したいものの一つと私は信じる。そこに可憐な抒情をよむ者は、激烈な癡性の正義を見おとすことあるかも知れぬ。この異情な詩的廉潔はかつてその年少の日にさへ一篇の恥づべき作品を誌さなかつたことを以てしても充分に知られる。最近數年の詩の動き、文學の移りに對し、重大な時期を轉向させたものに、我々のコギトがあつたが、その先鞭の價值は詩を書いた田中克己であらう。詩を書いて既に十年、處女作からして既に毅然とした價值であつた、何物の模倣でもなく、複韻でもない。これは未聞にして驚嘆すべきことである。中頃にしてその作風は初期の抒情のこまやかさを去らうとし、清冽のさま涼水の如くすむものがあつた。題名をなしてゐる「西康省」は傑作の一つである。まことに前人の未踏の境をゆく作品である。生命のない風土と記録は、この天稟の手によつて、調べ高いロマンチズムを與へられ、何らの誇張のない統計と報告は心にしみいる抒情に奏へられた。未踏であり、なほも追蹤を見ない所以である。田中の詩は自づからに鋭敏の詩心に感じられた日本心の最現在史を寫し、それは同時代の思想家の報告の如きと同日に論すべきものでないとは私の信ずるところである。しかも正義も批評も癡性も、時に抒情さへ、浪漫さへ、この鋭敏な詩心の餌食にすぎない。詩は永遠である。田中克己詩集も永遠の一作である。私はそれに教へられた愛讀者の一人であつた。(保田與重郎)

體裁 和裝。半紙半折判。

定價 一圓五十錢

送料十錢

東京市中野區大和町二五二番地

コギト發行所

四季



第十月號

東京四季社刊

田中克己著

詩集西康省

上海版的な漢詩集かとおもつてひらいて見ると、現代日本の「詩」であつた。然かも、有明、露風、自秋、李太郎、耿之介あたりにも見られないものを盛つた詩であつた。特に「西康省」の長篇は壓巻だとおもふが、短歌では、理念も言語もかう自由には行かない。然らば短歌ではどう工夫したら好いか、これは大切な問題で、現歌壇で「革新」などを唱へるなら、あんな低級なところにうろろせず、少くともこのへんのものをも参考すべきである。ローゼンベルクのに一氣單純でないが、藝術汎論としてはこの方が常道であらうか。

（アラギ第三十一卷第十二號所載）
齋藤茂吉氏「童馬山房夜話」より）

希望者は直接發行所へ申込まれたし。

體裁 和装。半紙半折判。 定價 一圓五十錢

送料十錢

東京市中野區大和町二五二番地

コギト發行所

四季十一月號目次

草舎にて(巻頭).....	三好達治	1
アルプス小三部曲(イヴァン・ゴル).....	堀口大學	4
噴井(他二篇).....	福原清	8
風韻.....	乾直恵	14
火葬場にて.....	田中克己	16
ドイツの悲歌(二)(リルケ).....	芳賀檀	18
秋の薔薇.....	阪本越郎	25
氣まぐれな半日.....	竹中郁	28
ウゴリノ(他一篇).....	竹村俊郎	30



薔薇(リルケ).....	大山定一	34
銀河.....	土屋村夫	36
波.....	塚山勇三	38
施與の圖.....	藥師寺衛	40
モウゲンス(二)(ヤコフセン).....	澤西健	44
犀星の詩業.....	津村信夫	53
詩集西康省.....	立原道造	55
中原中也賞.....	三好達治	53
會員の詩に就いて.....		60
後記.....		61



手にすると、満洲のきりぎりす、奉天の蟬、曠野の小

(中央大街裏)

學生、と云つた字句がまづもつて胸にくる。茫々の世界で、詩人の眸子が行きずりに心をとめたやうに、これらの詩篇も何か哀憐の情の見過しがないものがある。

觀念に煩はされない、驚きやすい犀星氏の眸子と呼吸は、曠野と、忽然としてあらはれる町と町の表情を詩篇に鮮やかにつたへてゐる。とくに哈爾賓を歌つた「中央大街裏」等々の詩は、私にとつて興深くあつた。氏の青春である「愛の詩集」を記憶する讀者には、少女ネルリの像や、成長したネルリの呼吸をきくやうに丁々と迫るものがあるではないか。

ことばは分ちがたけれども

肌さしのべ見よと云ふならん

おのが肌のうつくしきをいふならん

さらばいま少し寄りたまへ

大なる膝すすめたまへ

いかなる驚きのあるならん

(巨なる象)

「愛の詩集」の著者は「愛の詩集」の傳説世界に肖た瓦や人や寺院の傍を、うすい春の陽をあびて歩いてゐたのである。

犀星氏が茫々の曠野に見たイメージが一つ、

さびしき枯木のところどころに

たまり水光りて

鳥はいまだ啼きもやらぬ

ここは哈爾賓近き荒野なり

いづく果しなき荒野なるかな

砂けむり立ち

人ひとり歩むことなく

ただ明るき日のあふれたる荒野なり

荒野の美しさ極まり

大なる象のごとく横はれり

なほ、私は「作家の手記」この一篇の自傳小説を一

氣に讀み通した。且て萩原朔太郎氏の「氷島」を讀んだときも、その詩篇の一つびとつに書き加へられてゐる散文の註釋を、かりそめの註釋とは思へず、詩篇とこどもも誦したのであつたが、「作家の手記」に於ける小説と詩もひとしく必然のものを感じた。

小説の一篇を書き終るごとにかならず一篇の詩が浮んでくるので、夕暮のうすら明りに書きとどめておい

たのだとは、著者自らの言葉であるが、巻頭の「女中部屋」に始まる哀憐の歌は、かつての抒情小曲の韻律を、今日も北の國の梢にきくごとく、人となることのきびしさが、しみじみと歌はれてゐた。

(室生犀星著 詩集「哈爾賓」
草木屋出版部發行)

詩集 西康省

立 原 道 造

この道を泣きつつ我の行きしこと我がわすれなば、たれか知るらむ——と言ふ表情のあひだで、僕は何

をうけとればいいのか。そのあとに書きつらねられてゐるかすかすの詩句は僕らに何を語りかけてゐるのか。

……詩人はたいへんにイロニイを愛する。そして愛し方もまたすでにイロニイである。僕らがいまこの本といつしよにゐるときひどい拒絶をうけてゐる。この詩人が拒絶してゐるものは何かとかがへてゐて、ふと僕は僕らに向つてそれがなされてゐると知つたとき、不意にこの詩の本が目のまへにひらける。「我がわすれなばたれか知るらむ」と言ふ言葉が何であつたか。だがそこになくはならなかつたのか。

この孤獨のなかで詩人は微妙な神経と趣味にさへられ、色のかはりに色あひを用ゐながら、詩の可能と詩の輪廓とをだけつひに描き示して、詩を示さなかつた。詩をうたふ場を拒んでゐるものが何であるかは、聰明にもかくしてゐる。そのかくれた奥でだけ歌がひびく。

彼等が口をあけて歌ふとき

その口腔はうす紅い

——それを俺は永い間愛して來たものだ

芳ばしい微風が薄い雲をひく
その奥で歌だけがいつまでも残る
世界はその方がもつと美しい

(歌唱)

この最終の一行が、彼の魂にたいへんに近く、あるひは魂自らとむすびつく。悲劇となることはここではじまる、ひとつの世界に方向だけを設定して、すべてを消してしまつたときに。かうしてこのとどまらねばならない悲劇が、その感情が彼をリリズムに引きよせる。そのリリズムがふたたび詩の可能を彼に近づける。しかし結局ただ詩の可能と輪廓とを。この循環がいかなるときにも執拗にくりかへされてやまない。彼は詩のなかにゐてすら、詩からとほく、だれのためにもなく拒絶しつづけるのである。伊東靜雄にあつて、詩素と呼ばれた場と、この詩人にあつて輪廓と呼ばれる場とを注意してくらべたまへ。ふたつの拒絶といふ言葉は、ふたつの極となつて、僕らのまへに淵をひらく。その淵に花を架けるのはおそらく昨日の詩の

美しい展開である。發想の瞬間によみとられる、詩の表情よりも多分もつと適確に淡い心情である。このやうな詩は昨日の美しい新聲であつたし、おそらく今日もなほ、従つてまた永遠に美しい歌聲であらう。しかも詩人はそれをうたつてゐるのではない、このリリズムが、もつとあちらのもの、循環しながら詩の方向をだけさしめす。餌食となつて抒情が存在し最大限に完成し得るのは、悲劇者の持つ運命であり、しかも詩人は詩人の運命のなかに住まなかつた。彼にとつて悲劇とは何か——

かぢりかけの幾片かのパンとソオセイヂ

食鹽の瓶と並んでは石竹の花薔

くすんだ銅版畫の中で魚釣るひとびと

すべては食卓より上にある

(悲劇)

つひに繪を描いてやまないこの詩精神は何と呼ばれるか——しかも顔料は僕ら共通の意味でつめたい溶液で描いても描いても透明に何ものをも畫布の上に描き得ない。そして筆すらつひに凍つてしまつて、平らな面を塗り得ないまま、それが失つた筆の端で、線と點とをだけ描いてしまふ。しかしその傷ついた軌跡が色を帯びて、僕らの視線をとらへ得るか——すべてを餌食として誇らかに世界設定を成就した詩人が、停止するのはここである。

このとき、この詩人をもふくめて、僕らの「午前」とも呼ぶべき異質の時代が、このかがやかしい先人の詩を超えて、黎明を染めねばならない。

田中克己著 詩集「西康省」

コギト發行所發行

田中克己所蔵本索引

資本主義精神の直接的育成者たり得ない
近代ヨーロッパ文化の起源が存する
といふにある。この結論については色
色異論もあることであらう。だが、

三好 達治

夜 沈々

僕 批評家が批評する。作家は黙つてそれを讀むのだが、ときには作家も何か云ひたいことがあるだらう。僕は君の「夜沈々」のアツクレヴェウを受持つたが、アツクレヴェウも筆者が作家と對談して、その談話を筆記してそれに代えて悪いといふ法はないだらう。

三好 イエス。

僕 君の文章は甚だ入念に書いてあるやうだが、端麗な文章だと思つた。君は端麗な文章を書かうとしてゐるのではないか。

僕 念を入れて書いた僕の文章は、年月がたつてから自分で讀むと却つて不愉快だ。僕は努めて、しつこく書くつもりだ。あくまでも、しつこく書くつもりだ。過ぎたるは及ばざ

るが如しといふが、過ぎてても及ばざらんよりは過ぎた方が及ぶだらう。
(同席の人たち、みな賛成の聲)
僕 あの書物にある隨筆と詩歌感想と從軍記のうち、君は何が一ばん自分で好きか。昆蟲、野鳥、蛇、蛙などのことを書いてゐる思ひ出風の隨筆は面白い。寫生風に書いてある從軍記「上海雜感」は、君がノートを持つて上海の街を歩いて書いたのか。

彼 ノートを持つて歩いた。手拭を腰にぶらさげて歩いた。僕はあの本のなかで、詩歌感想に自信がある。是非とも讀んでもらひたい。

僕 時節がら、本の表題も從軍記「上海雜感」としたらどんなものだったらう。せつかく戦亂中の上海に行つたのだ。「夜沈々」といふ表題は、李白の詩の句をとつたのか。

彼 違ふ。ヤチンヤチンと自嘲してつけた表題だ。あの本を校正してゐたころ家賃に苦勞してゐたので、家賃々々「夜沈々」とした。詩ではな

い雜文集といふほどの意味である。

僕 最近出版された詩集では、僕は田中克己の「詩集西康省」に感心した。坐右に羅いて愛誦してゐるが、あの詩はいいだらう。

彼 なかなかいい。ペシミツクな感じがあつた。

僕 完末の「支那」といふ詩のことか。

彼 全體的にペシミツクだ。頭のいい、智的な感じを受ける。

僕 青柳瑞穂譯ステファン・ツワイクの「知性と感性」といふのを讀んだか。スタンダールとカザノヴァの生涯が眞裸にされたところで書いてある。隨所に誰か知つてゐる人の姿が見える。君の姿が見えたり僕の性格が出たりする。奇怪にして面白い。

彼 僕はまだ讀まない。最近讀んだ本では、窪川稻子の「くれなゐ」が面白かつた。一言にして云へないが、感情のこまかい柔軟な作品だ。非常にいい。いづれアツクレヴェウに書

きたいと思ふ。

僕 ではこれで。(白水社)

井 伏 鱒 二

伊藤永之介

鶯

この本には伊藤永之介氏の四つの小説「梟」「鴉」「鶯」「燕」が収められてゐる。いづれも東北農村の話で連作の内容をもつてゐる。

伊藤氏自身の言葉によると、「梟」の中心人物のお峰は、その地方で梟といふ陰語で呼ばれてゐる濁酒密賣者で、晝間行商してゐるくと酒役人に見つかるので、夜が夜明がたのまだ暗い時分に賣りにあるくのでその名がある。例によつて題をつけるのにこまつた末に浮んで來たのがこの梟で、これなら全體の陰惨な氣味のある内容にもびつた

嵐の蔭に	山田清三郎
椎の木の家	鶴田知也
おちか一家の夏の話	上田進
二つの現実	清水幾太郎
關連の精神	中島健藏
子規の文學精神	柴生田稔
祈禱について	龜井勝一郎
岩野泡鳴傳	舟橋聖一
人間の理念	伊藤整

純粋詩の行方	神保光太郎
劇場巡見	尾澤良三
「冬の宿」の映畫化	中上川良三
諸井の交響曲	伊集院清三郎
理想	吉田義彦
生活・科學・教育	佐藤信衛
詩學	佐藤正彰
ロマンティズムの倫理	西村貞二
沈黙	井伏鱒二
等兵戰	森山啓
死	阿部知二

フランソワ・ラブレールの鼻	渡邊一夫
精神の政治學	河上徹太郎
秋の	島井熊一
歌	井澤光治
學界の	森山啓
文	河上徹太郎